

○時田家・全景  
一般的な一戸建ての家。  
雨が降っている。

○同・一俊自室  
雑然とした部屋。  
2007年の日めくりカレンダーが  
掛けてある。  
10月25日になっている。  
時田一俊(50)がパソコンの前に  
座っている。  
パソコン画面には『正社員募集 30  
歳まで』と書かれた求人が出ている。  
一俊、ため息をつく。

## 【脚本】見えない糸

森 悠哉

登場人物

時田小百合(25)  
時田一俊(50) 小百合の父  
時田美和(48) 小百合の母  
相葉仁(28) 小百合の彼氏  
信者

○同・廊下  
玄関、部屋、居間とつながる廊下。  
一俊が自室から出てくる。  
居間から時田小百合(25)、時田  
美和(48)の声が聞こえる。  
小百合「お父さん、まだ新しい仕事見つか  
らないの？」  
美和「どうかしら」  
一俊、居間の前で話を聞く。

○同・居間  
小百合、美和がテーブルに座っている。  
小百合「何も聞いてないの？」  
美和「うん、お父さん、あんまり話したが  
らないから……」  
小百合「お父さん、プライド高いから、いい  
会社の求人しか見てないんですよ。あの年  
で雇ってくれるところなんて、限られてるの  
に」  
美和「小百合、そんなこと言っちゃダメよ」  
小百合、立ち上がる。  
小百合「私、嫌だから。ずっとお父さんの面  
倒みるなんて」  
美和「小百合！」  
小百合、居間の扉を開く。

目の前に立っている一俊。

美和「あなた」

一俊「小百合」

小百合、目をそらして居間を出る。

絶望した一俊の顔。

○タイトル『見えない糸』

○同・小百合自室

小百合、机の上のノートパソコンで仕事をしている。

2008年の月がわりカレンダーが掛けてある。

10月になっている。

扉をノックする音。

小百合「はい」

美和が入ってくる。

美和「仕事中？」

小百合「明日のプレゼンの準備」

美和「……ちよつとだけ、いい？」

小百合、怪訝な顔をする。

○同・廊下

小百合と美和が一俊自室の扉の前に立っている。

小百合「何これ……」

扉には無数の赤い線が書かれている。

小百合「ここ、お父さんの部屋でしょ？ 誰

がこんなことしたの？」

美和「お父さんが、描いたの」

小百合「お父さんが？」

美和、小百合にすがりつく。

美和「お父さん、何か怪しい宗教にでも入ったのかしら？ もしかしたら、何かの病気に。小百合、ねえ、どう、思う？ ねえ」

小百合「知らないわよ」

と、美和を振りほどく。

小百合「そんなに気になるなら本人に聞けばいいじゃない、ほら」

と、扉を指差す。

美和「それは……あなたがやってよ」

小百合「なんで、私が」

美和「お願いよ、ちよつとでいいから」

小百合「いやよ、別に好きにさせればいいじゃない」

美和「小百合」

小百合「私、まだ仕事があるから」

と、その場を去る。

○同・一俊自室

真っ暗な部屋の中、パソコン画面だけが光っている。

パソコンの前に座る一俊。

ひたすらキーボードを打っている。

○同・小百合自室

小百合が入ってくる。

深いため息をつく。

小百合「あたしに、どうしろっていうのよ」

○レストラン

高級そうなフレンチレストラン。

小百合と相葉仁（28）が、食事をしている。

仁「これで、今回の企画はほぼまちがい無し

だな。君のプレゼンのおかげだよ」

小百合「その通り、感謝しなさい」

仁「言ったな」

二人、苦笑する。

小百合「うそ。仁が手伝ってくれなかったら

絶対失敗してた」

仁「気にすんなよ。俺達にとって、こんなの

まだスタートラインだよ」

小百合「目標高いわね」

仁、ワインを一气飲みする。

仁「まだまだ、こんなもんじゃ満足できないよ」

小百合「ちよつと、飲みすぎじゃない？」

仁「僕達の関係についてもだ」

小百合「え？」

仁「ご両親への挨拶だよ」

小百合、表情を曇らせる。

仁「もう俺達だって結構長いんだし、いいかげん行かないと、いろいろとさ」

小百合「まだ、早いんじゃないかな」

仁「……また先延ばしにするんだな」

と、ため息をつく。

小百合、うつむく。

仁「ごめん、悪い酒になってる。もう、出よう」

小百合「うん」

仁「先に出ててくれ」

小百合「え、私も払うよ」

仁「いいから」

小百合「そう……ありがとう」

と、立ち上がり、店を出る。

仁「おい」

と、店員を呼ぶ。

店員「はい」

仁「店長によろしく言っといてくれ」

と、赤い線が描かれたカードを差し出す。

○時田家・全景（朝）

○同・玄関（朝）

小百合が帰ってくる。

小百合「ただいま」

返事は返ってこない。

物音がする。

○同・台所（朝）

小百合、台所をのぞく。

一俊と数人の信者が冷蔵庫の前に立っている。

小百合「お父さん？」

一俊、小百合を振り返る。

小百合「何してるの？」

一俊「いや、ちょっとな」

小百合「その人達、誰？」

一俊「ああ、私の知り合いだよ」

小百合「それは？」

と、一人の信者の足元を指差す。

赤いペンキが入った缶と筆が置いてある。

一俊「これは……」

小百合「その人達、どんな知り合いなのよ」

一俊「……」

小百合「何か言ってみよ」

一俊「……」

小百合「別に、好きなことやればいいわよ。

どうせその歳じゃ、新しい仕事なんて無いだろうし。でもね！ 私やお母さんに迷惑

かかることはやめてよ！」

一俊、なにか言いたそうに口を開くが、言葉は出てこない。

信者達、小百合にゆっくりと近づく。

信者「お父さんを、いじめないですよ」

と、何度も繰り返す。

小百合、じりじりと後退していく。

一俊「やめろ！ やめるんだ」

信者達、うなずき、台所を出る。

一俊、小百合に近づく。

一俊「小百合、明日が何の日か、覚えてるか？」

小百合「え？ 何のこと？」

一俊「いや、なんでもない」

と、台所を出る。

小百合「……何なのよ、いったい」

と、冷蔵庫の扉を開ける。

冷蔵庫の中に、無数の赤い線が描かれている。

食料品にまで線が描かれている。

○同・居間（朝）

美和がテレビを見ている。

小百合が入ってくる。

美和「あら、帰ってたの。ごめん、テレビ見てて気づかなかった」

小百合、美和を睨む。

美和「何かあったの？ 顔色悪い」

小百合「聞こえてたでしょ？ お父さんと話してたの。こんな近くで聞こえないわけないじゃない」

美和の表情が曇る。

小百合「また、私に押し付けようと思ったんでしょ？」

美和「そんなこと……」

小百合「なんで嘘つくの？ お母さん、そうやってごまかしてばかりじゃない！」

美和「……小百合に、そんなこと言われたくないわよ」

小百合「どういう意味？」

美和「昨日はどこに泊まったの？」

小百合「仕事が長引いちゃったから、近くの友達の家泊まったの」

美和「なんて人？ どこに住んでるの？」

小百合「なんでそんなこと言わなきゃいけないのよ。別に、今日休みなんだからいいじゃない」

美和「そうやってごまかすのね。私とそっくり。お父さんともね」

小百合、居間を出て行く。

美和、両手で顔を覆い、ため息をつく。

美和「もー、限界」

○同・小百合自室（朝）

小百合がベッドの上に寝ている。

小百合「明日」

と、カレンダーを見る。

10月25日の欄。

小百合「平日じゃない」

仰向けになり、天井を見つめる。

小百合「赤い線……」

○公園（夕・回想）

一俊（33）と小百合（8）、ブラン

コに乗っている。

小百合、泣いている。

一俊「ほら、もう泣くな。誰も小百合をいじめないだろ？」

と、頭をなでる。

一俊「実は、俺も昔、いじめられたことがあったんだ」

小百合「ほんと？」

一俊「ああ、そのときに思ったんだ。いじめてくるやつなんてどうでもいい。ほんとに大切な人とは、ここと」

と、小百合の心臓を指差す。

一俊「ここが」

と、自分の心臓を指差す。

一俊「見えない赤い糸で繋がってるんだよ」

小百合「見えない赤い糸？」

一俊「そう。だから、心配すんな」

と、小百合の頭をなでる。

○元の時田家・小百合自室（朝）

小百合がベッドの上に寝ている。

小百合「そんな昔のこと、関係ないかと、苦笑する。」

小百合、目を閉じる。

小百合「なんで、こんなことになっちゃったんだろ……」

○同・全景

空が厚い雲で覆われている。

雷が聞こえる。

雨が降り出し、次第に大雨になる。

○同・小百合自室

薄暗い部屋。

小百合がベッドで寝ている。

目を覚まし、上体を起こす。

小百合「寝ちゃったんだ」

と、頭を抱える。

顔を上げる。

小百合「嘘……」

と、表情が強ばる。

雷の光で、部屋が見える。

部屋の壁や物まで、いたる所に赤い線が描かれている。

○同・居間

薄暗い居間。

小百合が駆け込んでくる。

小百合「なんで……」

居間も小百合の部屋と同じように、赤い線が描かれている。

部屋の奥で美和が、荷物を鞆に詰めている。

小百合「お母さん！」

美和「小百合！」

と、駆け寄る。

美和「ちょうどよかった！ 今から呼びに行こうと思ってたのよ」

小百合「何してるの？」

美和「出ていくに決まってるじゃない。もう限界、もう無理よ。小百合、行くでしょ？」

小百合「え、うん」

○同・玄関

外の雨音が響く。

美和と小百合がやってくる。

美和「カサ、忘れないでよ」

と、靴をはく。

小百合、立ち止まる。

美和「どうしたの、忘れ物？」

小百合「やっぱり、お父さんと話してくる」

美和「え？」

小百合「どう考えてもおかしいよ。こんなことするなんて。もしかしたら、何か理由が」

美和「今更なに言ってるのよ！ あんなに嫌ってたじゃない！」

小百合「でも、このままじゃ、気持ち悪いの」

と、一俊の部屋へ向かう。

美和「小百合！」

信者「きた！ 運命の線に導かれてきた！」

歓声をあげる信者達。

一俊「静かに」

信者達、黙る。

一俊「小百合、まだだよ。全ては明日なんだ」

小百合、体が震えて、動けない。

後ろから、美和に引つ張られる。

美和「早く！」

小百合、美和と逃げる。

○同・店前

シャッターが下りた店。

外は雨が降っている。

美和と小百合が、軒下に走ってくる。

二人ともずぶ濡れだ。

小百合「何なのよ、なんであんなにたくさんの人が……」

美和「拭きなさい」

と、小百合にタオルを渡す。

二人、体を拭く。

美和「追ってはこないみたいね」

小百合「どこか、行くあてあるの？」

美和「それは……なにも考えてない」

美和、うつむく。

小百合「……ひとつだけ、いいところ知ってる」

美和「え？」

小百合「頼めば、たぶん、かくまってもらえる。そのかわり」

美和「なに？」

小百合「いままでついた嘘を、許してください」

と、美和に頭をさげる。

○仁自宅・居間（夜）

かなり広い、高級そうな部屋。

美和と小百合がソファに座っている。

その向かいに、仁が座っている。

仁「そうですか……そんなことが」

小百合「ごめん、何にも話さないで」

仁「いいよ、そういうのはデリケートな問題だからね」

小百合「ありがとう」

仁「赤い線、か」

美和「なにか、心辺りがありますか？」

仁「いえ。ただ、最近はそういうった、新興宗教のような団体が数多くありますからね。」

小百合「そういうった団体の一つなのかも」

美和「やっぱり……」

仁「とにかく、今日はここに泊まって構いませんから。どうするかは、また明日考えましょう」

美和「ありがとうございます」

仁「いえ、そんな。雨で冷えたでしょう。コーヒー、持ってきますね」

と、居間を出る。

美和「いい人ね」

小百合「うん」

美和「もし、仁さんがいいって言ったなら、あなた、ここで生活しなさい」

小百合「お母さんは、どうするの？」

美和「私は、やっぱり、家に帰るわ」

小百合「どうして」

美和「さつき、あなたが言ってたとおおり。やっぱり、このままじゃ気持ちが悪いの。」

お父さんと、話してみるわ」

小百合「お母さん……」

美和「夫婦だもの、私がやらないとね」

小百合「でも、私も」

美和「ほら！ ぼーっと座ってないで、何か手伝ったら？」

小百合「あ、はい」

と、立ち上がる。

小百合「じゃあ、寝るための毛布とか探して来るね」

と、隣の寝室の扉を開く。

見える。

小百合「あれ、消し忘れ？」

と、パソコンに近づく。

小百合「これ……」

と、パソコン画面を見る。

『真理の絆・運命の線』と書かれたインターネットのページが出ている。

小百合「運命の線……」

『ついに時は来たれり！明日、市民会館コンサートホールに集合せよ！』と書かれている。

下にスクロールしていくと、一俊の写真が大きくのっている。

小百合「そんな……お父さんが立ち上げたの？」

仁「そうだよ」

と、小百合の口を布で覆う。  
もがく小百合。

すぐに気を失ってしまう。

仁、小百合を静かに床に寝かせる。

仁「まったく、勝手にうるうるしないでくれよ。せつかく、もう少しお話してから、気持ちよく眠ってもらおうと思ったのに」

○同・居間（夜）

ソファの上で美和が気を失っている。  
仁「必要なものはそろった。さて、どんなシヨールになるのか」

○市民会館コンサートホール・ステージ上

数百人は入る大きなホール。

どん帳が下りていて、客席は見えない。  
小百合と美和が、赤いひもで椅子に縛られている。

小百合、目を覚ます。

小百合「ここ、どこ？ いったい、どうなつて。お母さん！ お母さん！」

美和も目を覚ます。

美和「小百合、ここはどこ？」

小百合「わからない」

○同・寝室（夜）  
小百合が入ってくる。  
真つ暗な部屋に、パソコンの光だけが

舞台の袖から、仁が出てくる。

仁「お、起きましたか」

小百合「仁、あんた」

と、睨みつける。

仁「なに、怒ってんだよ。言っただろ、こんなものじゃ満足できないってさ。あんな会社じゃ、本当の高みにはいけないからね」

小百合「くそ野郎」

仁「なんとでも。お、いらっしやっした」

と、舞台の袖から一俊が出てくる。

小百合「お父さん」

美和「あなた」

一俊「美和、小百合」

と、二人の前に行く。

一俊「ちょうど一年前からだな、こうして面と向かって話さなくなったのは」

美和「え？」

一俊「あの日、小百合の話を聞いた時、僕達の糸は切れてしまった。小百合は覚えていないかもしれないが」

小百合「……」

一俊「それから、どうやったら再び糸を戻せるかだけ考えていた。そして、気づいたんだ。多くの糸が集まれば、僕達の糸も蘇るって」

と、仁に指示を出す。

仁が舞台の袖に走っていく。

一俊「小百合、美和。新しい家族を紹介するよ」

どん帳がゆっくりと上がる。

観客席いっぱい信者がいる。

一俊「(信者達に) みんな、紹介しよう！

新しい家族の、小百合と美和だ！」

信者達、歓声をあげる。

小百合と美和、呆然とする。

一俊「(小百合、美和に) 見てくれ！ 一年間でこんなに新しい家族が出来た！ もう寂しくない、辛くもない。本当の家族だ！」

と、嬉しそうに会場全体を見回す。

一俊「え？」

小百合「何やってんのよ！」

会場が静まる。

小百合「家族の問題に、こんなにたくさんの人を巻き込んで。それを本当の家族？ 聞いて呆れるわ」

一俊、小百合の頬を平手打ちする。

小百合、睨みつける。

一俊「もう、なにも言うな。小百合はまだ、何もわかってない」

と、美和に近づく。

一俊「美和、君はわかってくれるよね」

と、ひもを解く。

とっさに美和が、一俊の頬を殴る。

倒れる一俊。

観客が騒ぎ出す。

美和、小百合のひもを解く。

美和「自分の娘にこんなことしておいて、何が本当の家族よ！」

一俊「うるさい！ お前達になにがわかる！ 俺を見捨てたくせに！」

と、立ち上がる。

美和「確かに私も悪かったけど、あなたも何も言わなかったじゃない！ 全部一人で背負い込んで！」

と、一俊に抱きつく。

美和「助けたかった……辛そうなあななを助けたかったのに……」

と、泣きじゃくる。

一俊「お前……」

小百合「お父さん」

と、一俊に近づく。

小百合「覚えてる？ 私がまだ小学生だったころ、お父さんが言った言葉」

一俊「いや」

小百合「私もこの前思い出した。本当に大切な人とは、ここと」

と、自分の胸を叩く。

小百合「ここが」

と、一俊の胸を叩く。

小百合「見えない赤い糸で繋がってるんだって、そう言った」

と、自分を縛っていた赤いひもを持つ。

小百合「こんなひもじゃ、意味ないんだよ」

一俊、呆然とする。

涙が溢れ出してくる。

一俊「自分で言ったのにな……すっかり忘れてた」

小百合、一俊の肩をさする。

小百合「この人達も、もとの家族に返してあげよう」

一俊、うなづく。

美和を離す。

一俊「(観客へ) 皆さん。すいませんでした。僕が間違っていました」

信者達は黙って聞いている。

一俊「(観客へ) 皆さん、自分の家に帰りましょう。自分のことを待っていてくれる人がいる家に、帰りましょう。私も、帰ります」

一俊、小百合と美和に近づく。

一俊「帰ろう」

一俊、美和、小百合、幕の袖へと消えていく。

騒ぎ出す信者達。

「何が起こったんだ」「これで終わりか」「あのお言葉はどういう意味だ」

という言葉が飛び交う。

仁が幕の袖から出てくる。

仁「皆さん！ 我らのお父さんは、自らが代表となり、運命の線を信じた人は必ず救われるということを、教えてくださったのです！」

信者達から歓声上がる。

仁「我々だけでこの教えを広めなければいけません！ 我ら運命の線は永遠に不滅です！」

と、赤いひもを高く掲げる。

一際大きな歓声。

仁、不敵な笑みを浮かべる。

仁「(小声で) 単純なやつらだ」  
歓声はやまない。

○同・外

一俊、美和、小百合が歩いている。

小百合「お父さん、ごめんさい」

一俊「ん？」

小百合「一年前、きっと私、ひどいこと言ったんだと思う。でも、全然思う出せないんだ。家族なのに」

と、涙ぐむ。

一俊、小百合の頭をなでる。

美和、それを微笑んで見ている。

三人の間に、うっすらと赤い線が見える。

完